

「俳人に幸せは似合わないんです。お腹を空かせて、寒さにふるえながら、一人ぼっちで旅をしなきゃいけないんです」。私が句会で言うと、いっせいにブーイングが起こった。「本当にそうなら私は俳句をやめる」という人もいた。しかし、暖かい部屋で、仲の良い家族とこたつでミカンを食べながら、テレビを観て談笑。山頭火や尾崎放哉にこんな場面は似合わないだろう。

「男はつらいよ」の寅さんは、いつも恋をする。たまに恋が実りそうな時がある。すると寅さんは怖くなって逃げだしてしまうのだ。幸せになるのが怖いのだろうか？ 寅さんは、木枯らしの夜に一人ぼっちで旅に出るのが幸せなのだろうか？

もう一人、そんな人がいる。朱里エイコだ。私が勝手に思っているだけで、「勝手に決めつけないでよ」とあの世で怒っているかもしれない。

朱里エイコは一九六四年十八歳で単身渡米。ラスベガスを中心に各地のショービジネスにデビュー。ラスベガスではサラ・ヴォーンと一緒に舞台を踏んだ事もあるという。アメリカで十分にエンターテイナーとして通用するような歌手が、日本にはたして何人いるだろう。一九七二年、「北国行きで」で日本でも大ブレイク。紅白にも初出場する。

そういえば、大ヒットした「北国行きで」の冒頭の歌詞は、「つぎの北国行きが来たら乗るの スーツケースをひとつ下げて乗るの」である。これはまるで寅さんではないか。